猊山和歌集

544
ゲ
14
67

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭24.7.13
18402.6

544
ケ
14

覩山和歌集序

醫生恒甫姓菅原、字柳洲、号覩山也、其體雄偉、其質寛裕、生于攝陽大坂、學醫於野間氏、悉得其傳方矣、亦還聊不恥盧扁之術也、且自壯年好於和歌、診治之間、則吟詠而、以自樂矣、其父仕余祖父大君、覩山亦然、且山所詠咏歌許多、無一寫筆紙矣、余亦久耽和歌、俾山誘引此道、山已抱病、

輩有日矣終知其不起而詠諸行無常之味歌四首安詳寂於江東岩山下春秋五十有八享保甲辰皐月十六日也其子南溟幼遇此凶訃乎哀哭不輟此時余在西肥隔月聞之後到東武育溟於余側而常令從仕溟長不空家法療材亦可越于父也間志味歌就余學之余報梘山之志改削溟詠以嘗之矣蓋余一日示溟曰

爾父梘山所詠和歌不知幾首然未輩成緝録自交塵灰歌籤亦烏有矣於今欲尋其吟無知之人惜哉秀歌不駐紙墨寧匪山一世之非哉爾亦所詠必莫散失此一冊者山於余亭所詠和歌百餘首也寫藏函底爾深有志此道故乃授之自今而後旦暮讀此篇而效之吟詠則何愁不得秀雅哉余不省文辞之醜拙採筆以述

其ノ旨ノ趣ヲ云フ

享保己酉初秋之日

梅屋主人誌

梘山和歌題目録

春

元旦 三
初春見霞 一
梅 一
春風 一
花 二
山家 一
川山吹 一
歸砌青簾 一

年内立春 二
海邊遠樹 一
多年親春 一
照水梅 一
鶯始聞 一
山家花 一
春雨 一
春祝 一

立春雪 一
鶯有慶音 一
紅梅 一
帰雁 一
花契多春 二
宮ニ見桜の錦 一
藤 一

夏

初郭公一　寝覚子規一　盧橘一

澤螢一　瀬照射一　野夕立一

夏月一　池涼月一　舟納涼一

杜蝉一

秋

七夕一　七夕立秋一　七夕月一

名月二　遠山暁霧一　山紅葉一

櫨の紅葉一　秋田一　九月尽二

冬

山家時雨二　氷稍結一　初雪一

旅中眺望二　旅人峯夕日一　旅中早梅一

市歳暮一

恋

逢不逢恋一　限一夜恋一　山家一

寄海恋一　寄草恋一

雑

山一
春雨寒父一
百里清風共自知一
隅田川渡舟山一
近江八景八
須磨の秋月二
祝二
露亀春竹一

名一
名雁是丈一
鴫立沢一
西海一
朝タかたみ一入一
思ハ中なかきの事二
社頭祝一

満春一
海辺眺望一
隅田川舟名一
三条奉行人
たちこ盃一
名月神垣一
千歳祝一

元旦

春立て日影さし明る山の端にかすみのかゝる年やいかなる
かすみの袖もかすむ 朝霞春立ぬらし日影さす
山の端ハかすみにけり年とせもはるもわかれのころのみとりそ

年内立春

よのわさも明けもしなからの立春にふる年の山の端にかすみ
海山もかすみわたるよ世の業ハ明けもしらす春ハ来にけり

立春雪

春立や松のみとりの明つもる雪もきえぬの梢の

立春梅

花垣のかたに咲ほころふ立春のけしき匂ふ梅かゝそふる

初春見露

我よせしこゝろのよそひも神世の思ひそめけん人の千とせまて

浦路遠樹

志賀の浦に浮かへて辛崎の松の梢もみえこそすれ

鶯有慶音

春毎に八千代の声もきこゆなり千代の声して鶯はなく

梅

匂ひまて心ひかれて梅かえを折てかさしに鶯の声

多年翫梅

いくとせか見し梅か香もかはらねはなれし庭の梅かえ

夜梅

闇なからたとるかけにも梅の香を吹ておくれる春風

春風

鶯の声をさそひて春風に一夜なからに梅か香をとる

照る春八千とせ若木も匂ひぬる

匂ひも吹のこす風の下にむかひて

たゝまなくよそにさく花を見て

うち招く初鐘も野やゝ

帰雁

吹よせて匂ひもとめし我宿に鶯の梅か枝

聞なれし鶯の声さへはなやかに今

花

春来れはあたにちるらん中にかゝる宿の桜木

小川の流に水をはなちやる梅の花の一枝

鶯始聞

くもらぬ梢も雲にたちそめて遠山桜匂ひそめぬらむ

花契多春

たのしみは花にちきりて咲梅の千とせを過る春に逢ぬる
いく千代の春を契りてうつしうへし花の梢そ幾春も見む

山寄梅

たくひなき春の山路にわけ入て梅の匂ひをしたふ旅人

山家鶯

都より山路のつかれ山家の垣ねの梅に鶯そなく
宇治の里の川辺の梅に鶯の声のうちに春をしるらむ
谷の戸を出る鶯の声も今はの春にあふ花の梅のもとに

川山吹

河水のよるへにつゆもなくつれて八重の井手の里の山吹の花

春鈴

またまくる春深くなりし野辺の浅みとりなる野辺の若草

藤

としことに梅あるまゝにたなひきてなほ春ふかき藤の色

四海酌春酒

千代の日の春を天地にゆつりても花にあかさる春の酒

春祝

治まれる御代の春とて吹風の枝も鳴らさぬ春も幾万代

初聞郭公

まちえても猶めつらしき一こゑは[illegible]人の初音[illegible]して

寝覚聞鳥

ほとゝきすしはなくはいかならん寝覚ならなる枕にそ[illegible]

五月橋

うしとみし袖をぬらすはしらぬはしら露立そふ[illegible]むすひ[illegible]

澤螢

小夜風のさはへほたるや浜辺のなかれあらしに影も流て

嶺照射

うき人[illegible]立[illegible]よりの[illegible]はまつのうに

野夕立

[illegible]のおもかけさ[illegible]夕立のゝ人はこえてむさし野ゝ原

夏月

月影の涼しく山も紛る夜は秋八露も置きも草葉にぞ置く

納涼月

青影や風よりにけりうつゝにもさしみる月の影残るかな

舟納涼

あらし吹く芦屋の里のさし渡る風よ打ち涼しき

杜蝉

夏しらく立つ杜影の涼しさに蝉の声なれ森の下露

七夕

よそ人の袖は涼し天の川まつ宵なれども幾代をへん

七夕立秋

舟八志よん星合の空や吹きもりて秋立ちぬる天の川風

七夕月

まもしも名残をしさに風清なる月夜なるかな合風景

八月十五夜

たか里ならしみつゝなる名をし追月にさしくるゝ中の打末

をさへいなみ諸つゝ夜なき今宵しも鳴てさへ今は月の光

遠山鹿声

月清く吹きて通ふ山も月も声今夜の尾の山の端

山家黎

志賀の花その霞もなし(すゝ木枕)ゆかりかくやきのした

桜かれる紅葉を

桜さくらく咲ても深山木の梢にも末や深き紅葉、

秋田

秋にはき来る秋の田のなかの大きなる稲かりてきる

九月尽

紅葉ハ入相の[illegible]散りはてゝ今日の秋風の[illegible]

吹く風も雨の音[illegible]夕暮てひなき[illegible]秋の名残

山家河岸

みやましのもとゝて山河のさゝなみ人の河辺なる[illegible]

よそよりもかもとれる小萩原この山里さ[illegible]

氷初結

霜結ふ[illegible]ぬるひや池の汀ハ[illegible]

初雪

寒く宿の池の氷も[illegible]

岩中眺望

[illegible]紅葉[illegible]

のふ[illegible]

雪の降りし日[illegible]

月[illegible]

夜もあけぬとのゝ門しくゝなりけり

何のよしに

又所もなきさ夜ころも初君の積もつゝ人さ夜の見ぬ

雪中早梅

跡もなくよのつねねさ降つもるおもひの外の梅の初花

をともなく新雪つもる今朝咲もやらぬ梅の初花

市歳暮

としくれて志るしもつきて市人のいそきもしらぬわか身なりけり

逢不会恋

一度の逢よの夢さなかなか又会ぬこそ恨みしものやかなしかりけれ

涙一夜恋

こひしぬ袖のこほれあるよは一夜すみぬ秋やさむ月のかけ

玉章

とる筆の印の毛にひ人こゝろのひく袖もおつる玉章

寄涙恋

契しハ夢かとおもふ涙の人る名ハなくて袖のみそぬるゝ

寄筆恋

うつされん人の名もたゝ筆の千代なれのこす跡ぬるかな

おもひ出るまて今まて見る紫しこゝろ〳〵も山まてゆきし見え

山

言

大空のつゆと成てしをしき道わ二丸煙の立わけの跡

游雲

流ふる涙は○よこさて浪の音○まおもふ声にもとりハ

松源宗叟

春秋も志るしも日ふも経台の春ハさゝゆく父やさゐかん

谷擁叟

こゝろつくしまま家あり〳〵ての日かたもさゝしきゝ谷の面影

海邊睨定

つき優さもなりもさ次まゝ〳〵のさ河よの沖ハたやさそなる

万里清風只自知

岩戸ハ笑のこゑにてひらきし神代のむかしより風

相州鴫立沢にて

秋もまた鴫立沢のゆふくれハ色あるものに人やとふらん

紀州若の浦にて船中にて

浦山すさふこころのまゝに浪こそ月にうちよせ

於川にて須磨山にて

月影のもるゝハ三ヶ原須磨山

西海にて

西よりの春風浦の八夕数ふ

祇園之神祠御奉納の和歌

社頭春

こゝろありの花も咲ちる男山ふもとにさくら朱の玉垣

社頭夏

人の秋海辺の春ハ雨にしなる夏も涼しく短夜の雲

社頭秋

三笠山春の秋風吹よせて

社頭冬

峰積る雪の榊葉ふりつもる神の廣前

社頭祝

こゝろありの文国のための

肥州雲仙八景

金峯晴嵐

山風の

大曲帰帆

ま帆かた帆青海原は濃江して大より楽しさ帰りくる

裏山晩鐘

入相の音きこゆる山のかねも三井の車坂の日もくれゆくやうにて

三之町夜雨

より火もうけつ三之町の夜のあまよ西あたり小夜の袖垣

山下落雁

足あとよる田の面に落る山下に落すかりがね

表橋夕照

入日影日よりもなく夕日表橋渡の釜も照まて衣

立石秋月

浪の影かげつつ立石の月のさやけくも秋の夜

河藤暮雪

暮るる花もさく河宿の雲よりも降るよ

湖へ米よりたてこ入り歌よ見えと

とりしは

湖の里旅人も[illegible]

たてこ盃よ歌よ見えこのよしの旅は

月影の浦波もくれ家なりにしものともね

須磨のうらやく旅人ハ月十五夜

まつ月清くとりしを立出で楼まて

月松浦眺望にて清き風和やか

奉りもの

月のいさむ旅の[illegible]

分とつ夜の分にわ人民にまむ月の影も明らかくの依
わり人にミえて
さてめ此文世のなかいよいハ守すしも治めさし君の静ふうなさ
なしこゝめもよの此さ此しハ万葉の学の堂も静かハ彼許

当月神祇

あつま椒廣ミさ恵ハ神代よりかく仰くそ月よりまさる文

祝

此末ハ九州ふ光をたまもりし君の姫君か後つ代の表
後迄る国の名ひし八秋風のまりさ置くや若代なりかけ

社頭祝

まりや神の恵みもしくしく治まる代まりあひ見れまり

当霞祝

かくしくつや霞のまろ明月の鈴もり人紙ちし絶えてなくて
霞亀書作の縁紙にて　　滋賀朝臣
嵐てよ東おの鈴や声まる霞の千歳紙書く訓て生む泥
太れ方ハ霞と松寸なりし林ハ亀寿と
亀のよしむ事ゟ霞玉ん猴作のつくハぬるとも父老むし
やよひより命し高見なく大こさ東よりも紙を治て
読り二帝しうつすま紙一字つゝ一首の
上よ重く四首の歌
読法之御寂職相くこそく世ハ出河よりも蔵のよの井
行列して会うつる陽ハ九さ終まへしいそそ世法ちなさ
云姫田末よりひるるなる紙ハ心川とうさ東にをもてり
帝末りあくなり外仰よりとしもまさてへし八郡もろく合ひて

九州大學圖書印

下
二